

## 第 16 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 1 年 1 月 30 日（月）午前 9 時 00 分～午後 0 時 00 分

2 場所 南箕輪村民センター 2 階 大会議室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
岡庭 一雄委員	小池 博委員
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	北原 秀樹委員
北原 曜委員	藤本 功委員
熊谷 秀男委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

おはようございます。皆さんお集まりですので、少し早い時間ではありますが、お願いいたします。お忙しい中、時間を差し繰りしていただきご参集くださいます。ありがとうございます。

それでは、委員長、会をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

皆さん、おはようございます。

それでは、第 16 回の会議を開催をいたしたいと思います。よろしくお願いいたします。

恒例に基づきまして、事務局より資料説明等をお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

はい。お願いいたします。

初めに、他の推進委員会の様子についてお伝えしたいと思います。第一推進委員会でございますが、昨日午前中に開催されました。内容は、多部制・単位制高校の配置は、再編整備候補案の坂城高校の転換と異なり、より中心部に近い屋代南高校の転換が優位であるとして合意いたしました。

長野南高校と松代高校の統合については、通学区全体の生徒の減少から統合はやむを得ないとして合意されました。

第一推進委員会は、もう 1 回、会合を持って報告内容を検討するとお聞きしております。

第二推進委員会でございますが、昨日の午後に開催されました。定時制については、基本的には多部制・単位制高校に統合していくことが適切であるということが、確認されました。それから、委員長から提出された報告書の案について審議されまして、意見が出された部分については、委員長、副委員長が修正を行った後、出来上がった報告書を県教育委員会へ提出することとされまして、昨日を最後といたしました。

他の推進委員会の報告につきましては以上でございます。

続きまして、上伊那農業高校定時制の高校改革プラン説明会というものが、ございましたのでご説明いたしたいと思いますが、上伊那農業高校の同窓会定時制部会と、同校定時制PTA主催による、上伊那農業高校定時制高校改革プラン学習会が1月22日、日曜日に行われました。

池上推進委員長さんと北原曜推進委員さんが出席されました。事務局からは3名出席いたしました。同窓生やPTA、生徒さんなど約70人が参加いたしました。

事務局から、多部制・単位制を中心に高校改革プランについて説明をした後、質疑応答がありました。

上伊那農業定時制の存続の要望が出ましたが、多部制・単位制高校は職員配置の充実や相談室の設置などで、定時制生徒の受け皿に十分になると説明してまいりました。時間としては、夜7時から9時過ぎまで行われました。それが1月22日のご報告であります。

それから、机上に報告書案と明記してありませんが、「目次」で始まる種類がございますが、これは今日ご審議いただきます報告書案の冊子でございますのでよろしく願います。

それから、けさこの会合の前に岡谷東高校、岡谷南学校関係者から署名であります、追加の署名が集まったとして提出されました。岡谷東高校のほうで1,568名分、それから岡谷南高校のほうで597人分の追加の署名が委員長さんのほうへ提出されました。

要望書も添えられておりますが、要望書につきましてはコピーがございましたので、委員さんのお手元に届けさしていただきました。

以上でございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、少し私から補追をさせていただきます。

まず、岡谷南高等学校と岡谷東高等学校の同窓会長さんのお名前でお手元でございますのは、地元のコンセンサスが著しく欠如しているので、実施の延期を求めるもの、という内容で提出されております。

それから、今事務局からお話のありました上農高校につきましても、1月24日に私の手元にこの内容につきましては、現在の上農高校定時制に通学する子どもの慣れなどを勘案をいたしましたりして、今後間違いなく多部制・単位制に定時制高校の子どもさんたちが、慣れることまでは延期を求めるという内容の文章が入っております。

それから、もう1点でございますが、箕輪工業高校の未来を育てる会という会長から、2つの内容につきまして意見が入っております、私どもが素案としております内容について、一部再編整備ということを最大の言葉としておるので、内容の中に廃止というような言葉があるがそれはちょっとまずいと。心を心としてないという、そういう強い抗議がございました。

それから、その次に実質的な内容につきまして、総合工業科、工学科これらの導入を具体的に求める文章が届いておりますので、これは後ほどまた分担についても、いろいろ内容についても議論があるところでございますので、文体についてまたご討議いただくと私のほう考えておりますので。それだけ提出をいただいておりますから、ご承知置きを願いた

いと思います。

そこまで何かご意見ご質問ございますか。なければまた後ほどいただいて、次に進ませていただきます。

それでは、実は昨日から、委員長、副委員長、皆さんのところからちょうだいいたしました内容につきまして、まとめについての議論をさせていただきまして、お手元に素案を提出をしております。その内容につきまして、これからご検討をちょうだいしたいと思います。

中で、特に私の知識で「てにをは」の部分が、いろいろ問題があろう、と私も考えておりましたので、事務局の先生方には大変ご苦労をいただいた、ということでございます。

まず、お手元の「目次」という資料をご覧くださいと思いますが、文体の構成でございますが、先般の文体の構成とあまりコンセプトは変わっておりません。

まず初めに、まさに「1 はじめに」それから2として「魅力ある高校づくりについて」ということで、これは全体の中でサマリーを申し上げます。

それから3でございますが、これは片側の重要な結論、委員会の結論を申し上げておまして、結論にややそぐわない、大変重要な問題ですが、ややそぐわないと考えて、付記としておるところがございます。

それから4として、魅力ある高校づくりについての意見集約や別途で2の説明を申し上げます。

それから5として、今度は先ほどの結論の説明を申し上げます。

それから「その他の意見」というところがございますが、主を集めるという立場で全部がもろ手を挙げてというわけではないということもございまして、重要な文については、それぞれの専門の立場で、この点は見直すべきだというご意見が強いところございましたので、それをその他の意見としてまとめてみました。

それから7の終わりには、委員長の考え方を申し上げたつもりでございます。

その次には委員さんの名簿、審議の過程ということで作成をいたしてございます。逐条的に、これから議論をいただきたいと考えていますので、よろしくお願いいたしますと思います。

おめくりをいただきまして、1ページ目ですね。これは、大つかみに算用数字1、2、「1」と、みんな仕分けしてございますが、文体として基本的には、算用数字1、2ということで、それぞれ議論をちゃんと、いうことに進めていきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

まず、1ページ目の「1 はじめに」でございますが、ここにつきまして何かご指摘や修正や点がございましたら、ご提出いただければありがたいと思います。

よろしゅうございますか。ではまた、ございましたらまたおっしゃってください。

2番の、「魅力ある高校づくりについて」ですが、ここは から までございますので、これはご意見をおっしゃっていただきたいと思います。

このあたりは、それぞれ経過でご意見もたくさんちょうだいしてしておりますので、そのあたりを集約申し上げたということでございます。

では、このところは通過をさせていただいて、3番の「委員会結論」ここからは、しっかり確認をいただきたいと思います。

(1)全日制の再編整備に関する事項、第3通学区全日制高校25校を22校に再編整備する。

それからは、今度は各区学校の固有名詞に関するのですが、岡谷東高校と岡谷南高校を統合する。箕輪工業高校の全日制の募集を停止する、ということでございます。

それから、飯田長姫高校と飯田工業高校を統合する、ということでございます。よろしゅうございましょうか。

はい。それでは、(2)総合学科高校に関すること。

第3通学区内に総合学科高校を1校設置する。具体的校名の結論を得るに至らなかった、ということでございます。そこはよろしゅうございましょうか。

はい。(3)多部制・単位制高校に関する事項。

第3通学区内に多部制・単位制高校を1校設置する。校舎、校地は箕輪工業高校を活用する、ということでございます。よろしゅうございましょうか。

では、次にいきます。

(4)定時制に関する事項。箕輪工業高校定時制及び上伊那農業高校定時制を新たに設置される多部制・単位制に統合する。

それから、飯田です。長姫高校定時制と飯田工業高校定時制を統合する、ということでございます。ではそのところは、それをお願いしたいと思います。

付記でございます。このところからご意見があると思います。第3通学区の再編整備については、魅力づくりに向けて地域社会の理解が得られるよう、その実施に当たり慎重な推進を願いたい、というところがまずひとつございます。これは、議論の中でまだ当然先ほどのお申し出書も含めてですね、コンセンサスが十分でないという多くの意見がございますので、それを踏まえて慎重な推進を願いたいという文言を入れました。

それから、岡谷東高校と岡谷南高校の統合については、地域の合意形成が他区に比べて不足しているため、魅力づくり、日程、方法等の面で慎重な対応を願いたい、という文言を入れました。ここにつきましては、かねてより皆さんご承知のように多くの議論をいたしまして、さらにこの文章にも補追するような、気持ちとして充分分かる内容の文体を送っていただきましたのですが、最終的にこのような言葉にまとめさせていただくということでございます。

それから、多部制・単位制高校の設置については、各定時制高校の実情を考慮しながら、各方面からの提言を尊重し、課題を克服するよう配慮されたい、ということでございます。これも、同趣旨のところがございます。特に、定時制高校から多部制・単位制というところの統合については、多くの皆さんから意見があったということでございます。これを付記させていただいたということでございます。

(小池委員)

確かに諏訪の状況は、地域コンセンサスの問題や、19年度実施の問題、新たに設置される、統合した後の魅力ある高校づくりなど、十分な論議がないというところはすでに委員の皆さんもご承知のとおりであります。

それに、どうしてもこの部分が気になります。魅力づくり、日程、方法等の面で慎重な対応を願いたいということです。この慎重な対応は当然ですが、やはりその前の文言を少し作らなければいけません。諏訪は、地域の合意形成が他区に比べて不足しているため、

例えば、拙速な推進を避け、魅力づくり、日程方法等の面で慎重な対応を願いたいという風な文言です。拙速な推進を避けるということ、拙速な推進を避けるということばは、やはり足かせというはおかしいですが、われわれとしては必要ではないかな、と思います。慎重な対応ということと、拙速な推進を避けるということとは、必然的に意味が違う部分もあると思うので、私としては、できたら両方の文言を答申中に付記いただけたらありがたいと思います。

（池上委員長）

この関連はいかがでございましょうか。

（藤本委員）

前日も発言しましたので、かなり気持ちをくんでいただいた文章にはなっておるのですが、前回から、若干私も委員長さんをお願いしたが落ちているのは、一番上との兼ね合いもあるのですが、一番上の「・」の「慎重な推進をお願いしたい」ということは、明らかに19年度一斉実施というのはもう無理なので、もちろん第3通学区内で地域合意ができて、まとまっておれば、19年度一斉実施がそれなりにいいことは分かるわけですが、実際には、飯田工業、長姫もそうですし、それから上農定時制を定めた箕輪工業の件もそうですし、岡谷南、岡谷東の件もそうですので、やはり地域合意で温度差が非常にあるわけです。

ですので、やはり温度差があるところを無理やり19年度一斉実施というのは、私は問題があるので、この一番上の「・」の慎重な推進をお願いしたいというのは、19年度実施は無理だから、地域の合意形成ができたところから順番に実施すると、こういう具合に解釈していいのでしょうか、この慎重なというのは、そういう意味ですよ。19年度実施というのはもう非常に苦しい、できたら19年度の縛りをなくして、若干遅れても合意形成ができたところから実施すると。

そういう点でいえば、諏訪については、切り離して、先ほど小池委員さんがおっしゃられました、実施時期については当面延ばしていただきたいと思います。

（池上委員長）

後で事務局のご意向は伺うとして、委員の皆さんで今の話は、小池委員のお話と今の藤本委員のお話まとめていきますと、どうやら、なかなか実施時期は拙速であると、まあ方法ももちろんあるのですが、そこがひとつあると思うのですが、その他の皆さんとから何かご意見ございますでしょうか。

（岡庭委員）

この問題は、私どもの旧第9通学区もそうですが、実施段階にあたってどういうそのプロセスで実施がされるのかというのが、なかなか見えないというところに、例えば南信州広域連合とすれば、ここにしっかり相談をしてやってほしいということを付記したい。南信州広域連合とすればそういう形で教育委員会へ、独自に要請を出したいと、こういうこと言っているわけですが、一番心配されているのはそのところではないかと思います。上伊那農業高校定時制もそうですが、定時制の生徒の実情にあった形でどういう対応をさ

れていくのかというところが、なかなか見えないということだと思うのです。

多分、多部制・単位制高校に移行しても現状の生徒の学習権がしっかり保証されるとい  
う、学校へ行くことは楽しいというのを思えるような形での教育内容編成されれば、多分  
そんなに心配しないだろうと思うのですが、その辺の点について多分、県教委の考え方が  
見えないというのがひとつ、今の議論になっているのではないかと思います。その点  
県教育委員はどのようにお考えなのかちょっとお伺いをしたいと思います。

（池上委員長）

先にですか。では、そういうご要請がございますがいかがでございましょうか。

今のお話について、事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

ご質問いただきましたので、お答えいたします。

まず1点といたしまして、基本的に定時、いわゆる夜間定時制が現在において、違った  
カリキュラムを組んでいる現状にないということをご理解いただきたいと思います。

当然ながら、生徒さんの状況によつての、段階的な教育的なものをちょっと区分けして  
やっている、というような実態はございますが、それはある意味今の全日制高校でも同  
様な形態というようなものはございます。

それで、私どもが基本的に考えている、いわゆる今までお出ししていなかった多部制・  
単位制についてのイメージというのは、ここでこういうような形をお決めいただければ、  
当然ながら今現在箕輪工業高校のほうからも、本日も委員長さんからお話ございましたよ  
うな要望等もでてきます。

また、当然ながら、そこに現在も定時制が配置されておりますので、その定時制のカリ  
キュラムと合わせて、また今の伊那の上農の定時制との状況のものを含めた上での議論を  
していく、ということにはしていきたいと思っています。

ただ、そこで見えにくいというようなお話がございますが、基本的に定時制が持ってい  
るカリキュラムというのは、基本的には変わらないと。

またある意味では、全日制に通じるところでございますので、後はよく言われておりま  
すような小規模の、アットホームな雰囲気というようなお話もございますが、しかしなが  
らそれは、多部制になった場合に、恐らくは午前の部、あるいは午後の部と、それから夜  
間とそれぞれの部において来られる生徒さんの状況も変わってくるかというところでござ  
います。

ある意味、夜間における定時制の生徒さんに対しては、より人数的に、恐らくは少なく  
なるであろうということを想定しておりますので、そちらにお見えの生徒さんに対しての  
学習の規模と、午前、午後部に来られる生徒さんの学習の規模というようなものも違って  
くると思います。

その辺も含めて、きめ細かい対応ということは、やっていけることができるのではない  
かと考えている次第です。

(岡庭委員)

それはよく配慮されていることは分かるのですが、それをどういう形で具体化していく、その地元の皆さんとの協議のプロセスがあるのか、あるいは全く、県教委が考えたとおりスパッとやってしまうのか。そのところでみなさんが不安に思っているところがあるので、その不安に思っているところをどのようなお考えなのか、今吉江さんおっしゃったように県教委も非常に深くお考えになっていることはよくわかりますし、理解できるのですが、そのことをどういう形でこの実施に当たって住民とのコミュニケーションを図りながら進めてくのかということについて、もしお考えがあったらちょっとその点をお願いします。

(吉江高校教育課長)

まずは、今まで申し上げているとおり、それぞれの推進委員会からいただきました報告を受けてという形にはなってきますが、まず、私どもとしまして、実施に当たりまして、当然ながらこれからのスケジュールで申し上げれば、県教委だけで動かすというようなことは毛頭考えておりません。当然ながら、それぞれの学校の関係者の方、あるいはそれぞれの学校の方々のご意向とか、そういうようなものもお聞きしながら、またそういうようなご要望に答えるようなカリキュラムがあるとすれば、そういうようなものはしっかり反映させることができるものは反映させながら、その上でスタートをしていきたいと考えております。

またそれぞれの、統合の今現在考えております学校につきましても、当然ながら両校の関係者の方のご意見を聞いたり、それはある意味で学校の先生も含めてということになりますが、お聞きしたりする中で最終的によりよい形にして、また、そういうような内容については、それぞれの地元の方々のご意見も反映できるようなことは反映した上で実施していきたい。

当然ながら理解を得るということも必要だと思っておりますので、近隣の必要に応じては当然ながら、これからその学校へ入られる生徒さんに対しての十分な説明等も行って、実施してまいりたいということを考えている次第です。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

(岡庭委員)

今のお話をしっかりと実施していただくと。私は何か制度化していただくということもお願いしたいのだが、それは県教育委員会の進め方のテクニックの問題もあるかと思うわけですので、今のことについては委員長のところでしっかり記録にとらえていただければいいのではないかと私は思っています。

(池上委員長)

もうひとつですね。先ほどご発言になったところで、この委員会自身の特徴かもしれませんが、実施時期についてのお話が先ほどの岡谷東、南。それから上農定時制で言えば、現在の子どもさんたちをどうするかと。その学窓をどこに最終的にするか、ということも

具体的にご発言がいただければありがたいなという側面がございまして、そういうご発言があったと思いますので、そこのご説明をいただければありがたいと思います。

（吉江高校教育課長）

まずは、実施時期につきましては、私ども基本的には今まで申し上げているのが、平成19年度から実施したいということは申し上げています。それでこれにつきましては、確かにいろいろなご意見がございまして、今後それぞれの委員会からいただきました報告を受けて、当然ながら実施計画の策定をする段階におきましても、いろいろなサイドからも考えていきたいとは思っておりますが、日ごろから各推進委員会の、単にこの第三推進委員会に限らず他の委員会でも申し上げるように、19年度から実施してまいりたいという前提には立っております。それが1点です。

定時制の統合の場合に、私ども基本的にはですね、現在の定時制にいらっしゃる生徒さんはそのままそこで卒業されるような形を考えている次第です。

これは、その話の中で、場合によってそうでない形態が望ましいというようなご意見があれば、またそこは考えさせていただきたいと思いますが。例えば平成16度から、この地域の関係でいきますと、岡谷工業高校の定時制を募集停止いたしました。

また、北信のほうでは、須坂高校の定時制を募集停止いたしましたが、その折にも残っていたらあった2年生、3年生、定時制でございますから4年もございますので、その3学年の生徒さんが卒業されるまではずっと残すという形で、現在も岡谷工業も、また、須坂高校もしております。

ですから、そういうような形態で望むというような前提が大前提ということで考えている次第でございます。

（池上委員長）

今のご質問やご意見を呈して県のご説明でございましたのですが、先ほどの小池委員ご発言のくだりはまだ、今の文章では不十分です。こういうお話なのですね。

（小池委員）

今の時期的な問題ですが、県の方はかたくなに19年実施と言っています。

私は、その慎重ということと、拙速な推進ということとにこだわるかということ、慎重という文言は、当事者が、受けた方が、慎重にやったと判断すればそうにもなるわけです。

拙速な推進は避けるという文言は、時期や内容や地域コンセンサスをも含めて、やはり縛りになるわけですね。故に私は拘っているわけです。

それと、どうしてもわからないのは、19年実施といった原案を作り、地域のコンセンサスを得て了解を得て、私は中学校関係ですので、保護者や今の中2の子どもたちに説明をして、で実施するということは、どう考えても物理的に無理です。その所は、委員の方々も皆どなたも異口同音におっしゃっていることだと思うのです。私は、本当の高校改革を願っているのなら、その辺の所をもっと柔軟に考えていくべきだし、そのような提起を願いたいと思っています。

中学校側としては、「19年にやれ」といわれたとしても、まだ、海のものと山のもの



ともつかない状況の中ですから。具体化にかかわる資料もできていませんのでね。これは非常に厳しいですね。

（池上委員長）

今の話で、そうするとですね、ちょっと揚げ足を取ってはいけませんから。拙速というのはやはり、言葉としては悪い方を取る話になってしまうのです。悪い事するのは、という話になりますので。

言葉はそこをかなり選ぶとすれば、もうちょっと言葉を選んだほうがいいのではないかなというふうに思うのですが、入れることについては、私もここまでできましたので、別にそのところでものすごく時間をかけてがんがんやるというたぐいしかもっていませんから。

いい言葉をちょっと、先生ですからぜひ選んでいただければ。

（小池委員）

私は、委員長さん程、人生のベテランではないですからね -。

（小林委員）

この付記事項等最後のその他の意見の区別が、私は未だに釈然としないのです。確認ですが、この付記事項というのは、おおかたの合意のものをここへ載せていくのか、それが意見が分かれてもそれはそれで尊重していくのか。

この前は、合意のとは違う。つまり、賛成もあったが異論もあったと、というのを付記事項に載せると確か確認したと思ったのですが、それがどうなのか。もし、それによって今出ているご意見は、反対意見があってもこれに載せると、いうことになりますし、そうでなくてやはり付記事項を、ある程度合意のあるものだけを載せるということなのか。そのこのところ、もういっぺん再確認をしないと、今の話が進まないと思いますのでよろしくお願いします。

（池上委員長）

はい。スパッと行くかどうかはわかりませんが、付記のほうは今お話の逆でございます。付記は、いわば結論に近いという認識でやっています。

それから、その他の意見というところは、議論をかなりやってきましたがまだ、まさに「その他の意見」で。ある意味反対意見もございませよというところは、しかしそのこと自身は挙げておかないとまずいのではないかな、という認識で書いたところも、バランス感覚でおいたつもりでございませので、ちょっと最初的小林委員のご指摘なところはちょっと私どもの感覚と、ちょっと違いますね。そういう認識です。

（小林委員）

それならそれでけっこうですが、この前はそういう雰囲気もあったようにみられましたが。そうしますと、付記事項というのはあくまでもここでほぼ皆さんが合意したものでね。

それから、「その他の意見」というのは、反対があっても意見が分かれても、載せてもいいということですね。そうしますと、今でているお二人の意見について、今の発言はどうしてもこれは残してほしいということになれば、その他のところへ入れるということによろしいですか。

（池上委員長）

その他ですか。

（小林委員）

ええ。例え今、小池先生のことについては、委員長さんとのやりとりもありますが、それはここで結論だしてもいいと思うのですが。藤本先生の意見は、ちょっと非常に合意が難しいような気もするのです。実施時期のことに直接触れているから、実施時期の問題と、それから一斉にやるか、合意のできたところからやるか、という意見ですから、それは、私はここできちんと位置付けは難しいかなと思っています。そういうご意見があるならその他のところへだしてもいいのではないかなと思います。

私は、この方向で、11、2 行目ですか藤本先生がこだわっている「この実施時期にあたり慎重な」というところについては、「合意」というのはこの前から出ているように、どこまでを合意というのか非常に難しいと思います。

それから、合意ができたところからというのか、できないところがいつまで合意というのを求めていくかということになると、非常に表現というか實際上、はっきりしているようで難しい面もあると思うので、私はこの表現でいいかなと思います。

先ほどのようなことをどうして入れてほしいといったらその他のところへ生かすという、そういうことで、いかがでしょうか。

（池上委員長）

そうすると、私から申し上げているコンセプトと、その文体についての問題でなくて、そこをどこへ入れるかという議論ですね。そのように取ってよろしゅうございますね。

（関 委員）

はい。私は実施時期については、県教育委員会がこれからすることですので、無理なところ、できるところから、といろんなやり方があると思いますので、そこはお任せしてもいいと思います。ですから、推進委員会としてはそこまで踏み込まずに文言の表現とすれば、「慎重な推進をお願いいたします」ということでいいのではないかと思います。

それから、小池委員さんからだされた「拙速」という言葉はやはり私も適切ではないと思いますので、そうですね、日程、方法等の面での後に「極力慎重な対応を願いたい」とか。そんな意味でここに重きを置いたらいかがかと思いますがいかがなものでしょう。

（池上委員長）

まず、それでは、小林委員のご提案は先ほどございましたように、私も理解して文体を考えて来たと思いますが、小池委員の意見は、どうでしょうか。今の話拙速はというところがあるのですが。

（小池委員）

否定的な表現は、ということですね。マイナスを含めてね。

（池上委員長）

ええ、そうですね。

（小池委員）

時期、内容、方法等含めて、とにかく焦らないで、ということを入れたいですね。拙速という否定的な表現がいけないということなら、その前の部分に「～が不足しているため、拙速な推進を避ける」という表現にすれば、文体としては全然問題ないと思うのですが－。ただ拙速と同義語の言葉が、不勉強でちょっと出てきませんが－。ただ、そういう強いニュアンスの表現がほしいな、という非常に強い気持ちもあるのですが－。

（池上委員長）

今のご議論の中で、大勢の皆さん聞いておられて、事務局も聞いている、委員も聞いている、強いて申し上げればプレスも聞いておりますし、ここでもかの皆さんも聞いておられますので、委員のおっしゃること自身については、このくらい、こういって語るところは十分であろう、と考えておりますのですがいかがですか。要するに日程方法等で慎重なというところで。

（小池委員）

では、今言われたことの、そのような表現で、願っているニュアンスはもう明確に伝わっているということを信じて－。

又、関委員の言った「極力」という言葉を入れていただいたら、いいのではないかと思います－。本当は「拙速」という言葉を入れたいのですがね。

（藤本委員）

1 番の「・」でこの第 3 通学区については、既に実施に当たっては慎重な推進をと書いてあるわけですね。

委員長さんに、「慎重な」というのは、県教委が言われている 19 年度実施を若干は超えることもあるというお気持ちが中にあるのですね、そういう発言があったものですから。

それでさらに、2 番のところで、岡谷東と南の件についても方法とか魅力づくりもありますが、日程の面で慎重な対応ってなっており、上の「・」と変わらないわけです。

だから既に上の「・」で第 3 通学区については慎重な推進を、と書いてありますので、当然それは入っておるので、さらに 2 番目の「・」で諏訪については日程、方法の面で慎

重な対応の前に、極力もしくは差し当たって延ばしていただくといったような、もうちょっと上の「・」よりも厳しい言葉で後ろに延ばしていただきたいと思います。

（池上委員長）

文体のよしあしよりは、思いがどう伝わるかということが問題でしょうから。今の関委員の「極力」を採用させていただいて、そこで文章を納めていくということではいかがですか。

（岡庭委員）

国語の先生ではないのでよくわかりませんが。今の藤本先生の意見ももっともものです。第3通学区全体で慎重なというと、なんでここだけやるかというと、ここだけ日程を考えるとということなのだという話になるので、それで、では岡谷東などの「・」の2番目、「特に」という文言を入れたらどうですか。こうすればいいであろうと思います。

（池上委員長）

ほかのところも「特に」あるのだと思うし。だから、今その話もそのとおりだと思うのですが。こういう問題は、時間を送って後で調整させていただくという手もあることはあるのですが。

（北原曜委員）

岡庭さんの意見ですが、「・」でもっていいと思うのですが、1番目の文章はとにかく、基本的には平成19年度実施という線ですが、2番目の文章については、合意形成が不十分だからということで、わざわざ日程も入っているわけですから。日程のところに実施時期というかそういうものが含まれているわけですから、ここで特にという文、付けた形で意志は反映されていると思います。

（池上委員長）

「特に」を入れるということですか。

（北原曜委員）

はい。極力入れなくても、どちらでもいいのですが、「特に」のほうが、いいかなという気がします。

（池上委員長）

それで「特に」はどこへ入れるのですか。

（小池委員）

一番先に。

(池上委員長)

一番先ですね。特に岡谷東高校とくるわけですね。その辺でまとめてください。

それでは、藤本委員先ほどのところは、それ以上詰めていっても場合によれば足も出てしまうこともあると思いますので、そこは十分事務局も承知しておりますと委員長も思いますので、そこはそれでまとめていただきたいと思いますがいかがですか。

(藤本委員)

前日も発言しましたが、第4通学区推進委員会の最初のまとめの内容をちょっと見たのですが、第4通学区でも19年度実施は無理だというような内容が若干入っておりますので、発言したのです。今度の教育委員長さんは第4通学区の2007年度、19年度実施の先送りに対して、教育委員長さんは推進委員会から実施時期について、提案されれば真摯に検討しなければならないと発言されております。県教委は19年度実施にえらいこだわり過ぎているので、やはりわれわれは実施時期については、ぜひと思って発言しただけです、もし慎重な推進というのがそういう意味を含んでおればよいと思います。

もう1点だけ、さっき吉江課長さん言われたとおり、私はそうなればよいとは思いますが、上農の定時制の場合は、ひょっとしたら入試倍率が非常に高くなるということも考えられるわけですね。午前も午後も夜も。そうすると現状の定時制の生徒たちは、入学試験ではじかれてしまう。

それから基本的には40人学級ですので、例えば塩尻の総合学科でも、少人数学級ができていたのか、多くの生徒が多様な科目を選択できているというように言われておるのですが、やはり教員のかかなりの無理の上に成り立っているわけです。塩尻の総合学科の先生方の持ち時間は18とか19時間と非常に高い持ち時間です。

それから、例えばクラスを2つに分ける、3つに分けるというのは、やはり先生方が自主的に授業を持ちますよということでやっているわけです。

そういう結果として例えば、社会科の先生が商業の授業を見るなんていう、そういう無理も若干あるわけです。だから先生方の努力、そういうものに、おんぶしているだけではだめであって、やはり多部制・単位制に対しても吉江課長さんがいわれたようにきちんと人を配置して、きちんとしたカウンセリングなりそういうシステムがきちんとできることが必要です。

そして少人数学級が単なる先生方の善意だけではなくて、きちんと実施されることを希望するわけです。ただ、入試での倍率というのは、やはりある程度4、5年か、何年かたって落ち着かない限りは、非常に高倍率になるのか、私も全く予想がつかないと、前々から言っているわけです。

それから、学校自身が3修制ということで、非常にそれに力を入れてくると、4年でも5年でもゆっくり勉強したいという夜間の定時制の子どもたちにとっては、やはりそのところで居心地の悪い学校になってくるわけです。先ほど吉江課長さんは、卒業されるまでは残れるといわれましたが、それは当然で、吉江課長さんが言われたとおりですが、プラスアルファとして、やはり多部制・単位制がある程度安定して学校の姿が見えて、やはり定時制の子どもたちにとっても非常にいい受け皿になるなら、皆さんも納得するだろうが、それが見えない過渡期においては、やはりちょっと心配しているわけです。

その点、下の３番目の「・」には、各方面からの提言を尊重してという言葉が入っているのでしょうか。その各方面、提言を尊重してというところはちょっと、あまりオブラートというか、具体性が非常にないので、そんな点で私はもうちょっとこの３番目の「・」の辺が具体化すればと、そんな気がします。

（池上委員長）

今の話のところは一応そういうことですね。いわば万感の思いを入れてそういう言葉でございます。

（米澤教育次長）

藤本委員さんの今のご質問ですが、例えば今の上農の定時制に行っている子どもたちが、入試ではじかれるのではないかとのご心配もいただきました。

例えば、それはこれからのつくり方でももちろんあるわけですが、入試の方法も、今やっている方法を、さらには工夫しているんなやり方がきっとできると思うのです。

従って、同じひとつの物差しということではなくてやる方法、既に先例であります例えば都立桐ヶ丘高校をはじめ、いろんな形態を考えていますので、そういう心配もないような形を考えていけるのではないかと思います。

また、卒業について、上伊那農業の卒業を望むというのは通例で、先ほど吉江課長申し上げたとおりでございますが。やっていく中で、入学した高校で卒業するのは原則であります。例えば新設になった多部制・単位制のほうに途中で移ってもいい、というような意向があるようなお子さんについては、移動するということも可能な部分もあるかと思えますので、それはかなり実質的に弾力的な部分を持っているとお考えいただければと思います。

教員の配置、カウンセリングできる体制等、もちろんこれはそうしないとやはりできない部分がありますので、人についても厚くするという気持ちではあります。

それからまた、今３修制等で居心地が悪くなるというので、そちらの方にあまりシフトしないというこの配慮ももちろん、３修制を目的とするわけではありませんので、３修制は採用できるという部分があるということで、これもガイダンス、子どもたちへの相談体制の充実によって解決していけることではないかと思っていますところであります。

今の文言の各方面からというのは、今委員長さんおっしゃったようないろんなものを含んで、今の両先生のお気持ちなども含んでいると解釈して結構でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

（小林委員）

３つ目の「・」のことで、藤本先生とちょっと違う意見ですが。ちょっとこのところだけ、文字面ですが直してもらったほうがいいのかというのが、１行目の多部制・単位制の高校の設置については各定時制の実情を考慮しながら、とありますね。これ「実情も」と変えてほしい。ということは、多部制・単位制高校は定時制の延長ではないわけです。

全く新しい学校であるから、定時制の延長みたいにこれでは捉えてしまうので「も」と修正してほしいということと、それから各方面からの提言というのは、これはぜひこういう意味も含まれているからということですがちょっと藤本先生のおっしゃっているのは、多部制・単位制の設置についての提言とはちょっと違うことだと思うのです。

そうではなくて、上伊那部会でかなり具体的な案を作りました。それから箕輪工業の未来を育てる会からも、私がちょっと思っていなかったことの貴重な提言がありました。これは本当に今になってもう少し検討しておけばよかったかなと思うのは、この多部制・単位制というのは今後いわゆる全体の枠組みの中で、全日制の枠組の中へ入るのか、または定時制という枠組みの中へ入ってくるのか、または独立した多部制・単位制という形になるのか、いわゆるよく新聞に出てくる中に全日制と定時制とありますが、定時制の中に入れられてしまうとすると、ちょっとイメージ上非常にでかい問題になるかなということで、枠をどうするか。それからその枠によっては全日制のいわゆる高体連の大会に出れるか、出れないかという問題出てきます。そういうようなこともあります。

その枠をどこに位置づけてもらうかということと、ちょっと私も気が付かなかったのですが、授業料が全日制の場合と多部制・単位制の場合には変わってくるのかどうかということも、提言でありましたので、推進委員会そのものの案ではなかったのですが入れてほしいのです。私たち上伊那で考えた、その提言と未来を育てる会の提言を尊重するという意味なら、直さなくても結構ですが、そういう具体的な提言は、本当に今のところで出た以外はあまりなかったものですからお願いします。そういうことで考えたほしいということと、藤本先生のおっしゃったことはむしろ、どうしてもということならその他のところへ入れたらいかがですかということです。

（池上委員長）

その字句の運びの問題ですが、今1行目の実情をというのは、多部制・単位制高校の考え方からしてもなるほど、助詞の使い方は「も」のほうが私もよろしいと思うのですが、ここはいかがですか。ではそういうことにさせていただきます。

今度はカテゴリーの話は、もともと私の認識が間違っているとすればですが、これは全日制ではないとこういう認識で運んでまいりましたが。また、授業料になるとこれは私には全然わからないことですが、県で何かコメントございますか。

（岡庭委員）

今その話をしちゃうので、元の話は戻っちゃう。全日制、多部制・単位制校つぶれたら全日制高校ひとつ減らそうではないかといって諏訪の苦渋の決断をし、下伊那の苦渋の決断をして、今では箕輪工業高校は全日制の多部制・単位制高校でそこへ入るのですよっていった話になったら、これは元の話は壊れちゃう話ですから。これはもう多部制・単位制高校は、多部制・単位制として今回は第三推進委員会で位置づけたということでいいのではないのでしょうか。

（池上委員長）

ご承知のように私もそう思っておるのですが。

(米澤教育次長)

今岡庭委員さんがおっしゃったとおりでよろしいと思うのです。もともと全日という意味ではもちろんないわけでありまして、区分につきましては文部省でもいろいろ工夫をして、それぞれ使い分けたりするのですが、単位制ということで、単位制の中で総合学科と多部制・単位制という仕分けするときもありますし、私どもでも、今全日制と定時制という区分けしかないわけですが、そのほかに多部制・単位制という区分けもうひとつ設けるかとか、それはこれからの問題であります。いずれにしる今岡庭さんいただいたまとめで結構だと思います。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

小林委員そういうことでよろしくお願いします。

(小林委員)

もちろん、全日制の中へ入れろというのではなくて、今言った枠組みが今後どうなるかということがちょっと気になったものですので、それは地元でも不安がっています。そういうことでお願いします。

(池上委員長)

よくわかります。他のまた、恐らく委員さんも大いに着目する世界だと思います。それは、念内の意をくんでいきたいと思います。

それでは、以上のところよろしゅうございますか。16行目、よろしいですか。

(川島委員)

内容ではございません。他人の重箱の隅をつつく話で申し訳ないのですが。2番目の「・」のところの他区という言葉が出てまいります。それから、3ページ以降に学区ごとにとして第7、第8、第9と出てまいります。現状としましてはやはり第3通学区しかないことで、ここで他区という言葉を使いますと、第一や第二通学区のことを指すのかという問題もありますので、他の旧通学区だとか、あるいは3ページ以降も旧という言葉を入れるだとかという配慮は必要であると思います。

(吉江高校教育課長)

平成16年から実は四通学区制に移行してから、私どものほうで言葉を使い分けております。「通学区」というと今の大きな通学区、それで「区」というと旧通学区を示すような形です。ですから、第3通学区の中には7区、8区、9区もあるというような位置付けで使わしていただいておりますので、今、川島委員さんからご指摘もちょうだいしましたが、もし、そういう趣旨でということこのままでよろしければ、そんなことで合わせてお考えいただきたいと思います。



(池上委員長)

それでは、ありがとうございました。そういう趣旨ですね。よくわかりました。

それでは、4 に入りたいと思いますが。ここは通読をしなくて皆さんからいただいた内容については、まとめて次のページの 3 ページの、6 行目まで記載してございますので、ここで何かご意見ございましたらお願いしたいと思います。

では、もしこれでよろしければ、また後ほどお気付きの点はおっしゃっていただく、という方法を採用させていただいて次に行きたいと思います。

3 ページ目の(1) 8 行くらいですか。普通科でございます。ここはいかがでございましょうか。ここは、「普通科」で切っていただきます。

それでは、同じような方法で 20 行目の(2) 専門学科、ここをご覧いただいてご意見をちょうだいしたいと思います。それはですね、32 行までというところになります。

では 3 ページ目の(3) 各区ごと、にというところ。第 7 区、このことでまたご意見があるでしょうか、4 ページに移らしていただいて 4 行目まででございます。

(藤本委員)

全体を、ざっと目を通したのですが、例えば具体的な学校名が出ている学校と出ていない学校もあるわけです。

それから、学科についても落ちている学科があったり載っている学科があったり。具体的にはこのようなことを、最初に意見を出していただいて十分議論して、その後に再編問題がいろいろ出てくるわけなのですが、若干議論が再編問題のほうにシフトしてしまって、こういうところの議論が不足しておったもので、こういう形になったと思うのです。例えば 7 区だけでも見てみますと、例えば清陵も二葉もないのです。

清陵、二葉がこのままでいいかといったら、とてもそうとも思えない。7 区ばかり見ていたのですが、ほかの区も見てみたら学校があったりなかったり、科があったりなかったり、学校にとっては特色学科が載っていないと、魅力もないと考えられているのか、対象外として、検討もされなかった、意見も述べられなかった、推進委員の皆さんは何も関心がなかったのだと取られても困るものですから。そういうような点が、ずうっと読んで気になったものですから、どこかで、ちょっと断るとか、何かしないと読まれた学校の方、名前の載っていない学校では、ちょっと気になるかと思いました。

もし、全部の科を入れる、学校を入れるとしたら、その辺を統一的にご検討いただいて、修正したほうがいいかと思いますが。

(池上委員長)

そのとおりよくわかりました。ただ、もしあれでしたら、全部消せということなのか、全部入れるのか、それとも思いの強いところをやれとか、おっしゃっているのか、そこら辺どうでしょうね。難しいところですね。

(藤本委員)

ただ、7区についていえば二葉、清陵も落ちているのですが、そうはいっても4ページ目の上から2行目ですか、この辺に多分二葉と清陵のことをかなり意識して書いていると思うのですが、そうはいっても具体的な校名はあがっていないわけです。どのようにまとめればいいのか、私もちょっと今アイデアが浮かばないのですが。

(池上委員長)

2行目はそういう認識でしょうね。少しある意味で、言いにくいところもあるわけですが、そういう認識だと思います。

(川島委員)

もし全部入れろということであれば、その14行目の「普通科の高校は」の頭へ固有名詞を入れればよろしいかと思います。

(池上委員長)

例えば、普通科の。すみません、もう一回おっしゃっていただけますか。

(川島委員)

諏訪清陵、諏訪二葉などとかですね。そういった固有名詞を冒頭に入れば、入れたことにはなったと思います。

(池上委員長)

どうでしょうか。

普通科の諏訪清陵、諏訪二葉高校各校とも地域の期待に応えるような学力向上をいっそう推進する。

(小池委員)

下諏訪向陽も入るわけですね。しかし、全部を羅列する必要はないのではないですか。

(池上委員長)

そうなのですが、それでも、こういう固有名詞というのは大事ですからね。

(熊谷委員)

これは多分各所にあると思うのです。ですから、飯田風越高校には家庭科があるのですが、これに出ていないのでどうするのだとなるので、殆ど議論をされていなかったものですから、今更あえていちいちふれるということはないと思いますし。実は9区にいきますと、実は非常に苦になっているのは、9区だけなぜかという、区外への流出入は少ないといいながら、最後に今後専門高校の再編整備を検討する必要があると、突然とんでいるのです。こういう、なにかどこで議論したのだらうということも出てくるので、これはできるだけ簡潔にしてもらうことのほうが、いいと思うのですが、ほかのところもみんな、

何か言い出したら切りがないようなものがいっぱい出てくるような気がするのです。

(岡庭委員)

学区ごとに推進委員会からだされた意見を集約すると、という程度の段階ですな。  
推進委員が出た意見を集約したのだと。

(池上委員長)

学区ごとに推進委員の意見を集約すると、その中には例えば、A高校は出て来なかったと、いいのです。それでは、それは。

あまりに後ろに持っていくと私も忘れちゃうので、この問題はここで決着しておきたいのですが。

では、これはですね、こういうことにさしていただきましょうか。この文体、文言を一応採用させていただいて、それでなおかつどうしても先ほどのように、特記しなくてはいけないという固有名詞がありましたら、後でだしていただくということで、今の岡庭委員のご意見も中に入れながら、文体を整えていきたいと思いますがいかがでございますか。よろしゅうございますか。ではそこだけちょっと、聞かせてもらいます。

ではどうしましょうか。諏訪二葉、諏訪清陵をどうしましょうか。それはいいということですね。特段いらない、書かなくてもいいということですね。はい。いいですね。

はい。その他いかがですか。この から そこのところで、いかがでしょうか。

それでは、第8区に移らしていただいて、ここは次のページの、おおむね20行目の前の日ということになっておりますが、ここはいかがでございましょうか。

(小池委員)

ちょっと質問でいいですか。

5 ページの箕輪工業高校にかかわってですが、これについて私は、個人的にも今まで言ってきた覚えがある中で、しかも地域住民の感情のある中で対応に、納得ができません。特に3行目には 施設の活用を考慮しつつ工業科設置の検討を行う、とあるわけです。

諏訪にも痛みを共にし、それも、耐え難きを耐えてやってきたわけです。形態は多部制・単位制にはなるわけですが、工業科設置も考えていくということになれば、これどういうことになるわけですか？ちょっとよく分かりませんが -。

改廃その他にかかわってもう少し言いますと、前回の時に箕輪工業は廃止するという表現でしたが、お聞きした所、廃止という表現はあまりよくないという表現があり、このような格好の表現になったということで理解しています。

特に諏訪の住民の気持ちとすれば、ある部分、8 通区の駒工の部分も含め、言葉は悪いですがはっきり言えば丸投げされたと感じています。私自身も、そういう感じが非常に強いのです。

そういう部分の中で、この文言で出された時に、それでは箕輪工業という高校は、一度廃校となり、多部制・単位制高校として新しく生まれ変わるのに、それでも尚工業高校としても残るのか？そこのところがよく私自身にはわからないし、無論、諏訪の人にはもっと分からないと思います。これでは全然変わらないじゃあないかという、認識や感情を得

る部分があるわけです。どう違ってくるのかという、その所の説明をいただきたいと考えます。

改廃をし、そして、こういう風になるのだという形が、明確に見えるように説明いただきたいと思います。

（池上委員長）

先に私からちょっと発言をさせていただきたい、関係する委員から誤解あっていけませんから、申し上げさせていただきたいと思います。

元来、この全日制の廃止について、いま小池委員のお話のようなところを申し上げれば、この地域とすればそれを甘受する、ということから出来上がった内容であると理解しております。

ただこの中で、現在も工業科については、昼間、夜間共に授業が行われておりますので、そのファシリティーは、多分生かしていかなければいけないのではないかと、いうことがあることでございますのと、これから出てくる小さな地域ですね。7、8、9 それぞれに専門科ができるだけひとつでうまくいったほうがいいのか、という議論とはちょっと逆行いたしますが、それをうまく活用して展開したらどうだろうか。

それは、北部の子どもたちにも、いい影響もあるだろうということも含めて、そういうふうな案が間違っているということでございますので、ここを特記していると、こういうことに相成っておりますが。

これは、小林委員よくご存じですね。

（小林委員）

小池先生の発言が、いつも私苦になるのですが、岡谷南、岡谷東との絡みで見るというのは非常におかしいと思うのですよね。

どうしてそういう発想になるのかね。

（小池委員）

諏訪の住民感覚で申し上げます。

（小林委員）

そういうのはまずいと思います。

（小池委員）

私自身の感情でも申し上げます。

（小林委員）

感情は出さないでください。

（小池委員）

わかりました。

(小林委員)

そうではなくて、あくまでも工業科というのは、多部制・単位制の高校に転換して、どういう学科がいいかという中で出てきたことであって、残す・残さないということはないと思います。

その多部制・単位制というのは決して普通科だけではなく、いろいろな科がありますので、そういう中でやはり工業科も普通科も設置した方がいいという、ずうっと前にもこれは提案して、特に異論もなく通ってきてこの時点で言われると、非常に心外であります。ぜひこれは生かしてほしいと思います。以上です。

(関 委員)

以前に小林委員さんから出された資料の中で、そういったことがあったと私も記憶しております。しかし、推進委員会でそれを決定したはずではなかったと思うのです。

もともと県教委の原案にあったところから、上伊那からその工業2校をなくすのは忍びないということ。各区1校減と決定した理由はいくつかありますが、その中のひとつに工業2校なくすのは忍びないということから、工業1校にということで諏訪も苦渋の選択をしたわけです。しかしこうなってきましたと、上伊那に工業が2校残ることになり、やはり諏訪の地域としては納得できないと私は思います。

それともうひとつ、駒ヶ根工業が工業として今後充実していく上で、箕輪にも工業を残すということになると、駒ヶ根工業の充実が難しくなるのではないかと。結果としてあぶらち取らなくなるというようなこともちょっと心配になります。

ですから、ここのところは、気持ちはわかりますが、午前、午後、夜間の各部とも普通科設置を原則とする、で切っていただいたらいかがかと思います。

(池上委員長)

もう一回おっしゃってください。

(関 委員)

「する」で句点を入れる。

(池上委員長)

3行のところを、「なお」の前に句点を入れて、「が」を消すということですか。

(関 委員)

はい。

(池上委員長)

で、後の文言も消して1校と。

(関 委員)

ええ。

(池上委員長)

そのところは、係ってくるところは工業科というところを消すと、こういうことですね。

(関 委員)

そうですね。原則ということで。

(池上委員長)

原則ということですね。

(小林委員)

関先生の意見に少し異論があるのですが。そういうことを言い始めると全て、どれもこれも完全に一致して進んできたわけじゃないですよ。そのときに反論があったらそのときにきちんと言ってもらえばよかったことであって、今ここへ来てそういうことをおっしゃるのは、非常に私は心外であります。

もしこれを削れば、恐らく地元はせっかく受け入れということで、散々視察をしていい方向へ持っていこうとしているのが、恐らく白紙に戻ると思います。

大変な事態になると思います。そういう責任を取っていただけますか。

(小池委員)

私も何回か休んだもので、その資料とそれから箕校の工業科を残すということを、今日初めて見ました。

それで、私もちょっと口が悪いし感情的になりますので、先程辰興先生からしかられましたが、私のしゃべっていることは諏訪の人間の持っている感情なのです。実感なのです。

そのような側面から考えてみますと、先ほども言ったように、これにはいろいろな思いはあります。しかしこのような中にあっても、こうやって耐えがたきを耐えて、やはり痛みを共にして来ているわけです。

その中で、箕工に工業科もありということになった時に、これはやはり何なのだ、となるわけです。私はそのことを申し上げているのです。

(藤本委員)

あまりこの工業科についてそれほど議論する必用はないと思うのは、あくまでも全日制の工業科としては、駒工がきちんと1校残るわけですし、あくまでも多部制・単位制という定時制の学校の中で、生徒にどういう教育をしていくかということになれば、私は普通科プラスせっかく工業の旋盤から始まって重装備の機械設備があるわけですので、例えば多部制・単位制で総合学科だってあるわけですので、施設活用の面で工業的な教育をやっていただいても、ここには特に今までの蓄積した教育課程、施設もあるわけですのでいいと思います。

工業科を残すといってそんなに頭に来るほどのことではなく、定時制課程でのあくまでも工業科で、しかも幅広い多くの生徒が来る中で、工業科というよりは工業教育もひとつ

の選択授業として用意して、提供しようということですので。私は全日制の工業科が残るという、そういうスタンスではないのですから、それほど気にされることはないという気がするのです。

全国的には、調査をすれば多部制・単位制の総合学科もあるわけですので、とりあえずは普通科を原則としてもいいですが、これから生徒の状況とか既存の設備の活用を考えて、こういうのも考えられるという気はします。

（岡庭委員）

いつも妥協のようなことを言って申し訳ないのですが、ここまでくれば妥協の産物しかないのだと思うのです。だから、今の皆さんのご意見を聞くと校内の施設の活用を考慮し、体系的実施学習を取り入れてという、工業科設置の検討を行うというところを、削除したらどうです。それはもう県教委は工業科をキャリア教育と書いてあるわけですから。そういうことでは納得できないのかどうかですが。

要するに、校内の施設を活用して体系的実施学習を取り入れる、ということです。ところで、今のいろんな人の思いを包含するということだと思います。

（池上委員長）

例えばこういうことですか。「原則とし」

（岡庭委員）

「原則とするが」

校内の施設の活用を考慮して、体験的実施的学習を取り入れてということです。ところへ、考慮して活用して、体験的実施的学習を取り入れて、単位を認定しキャリア教育の充実を図るというので。これ、取り方によっては工業科となるとも思いますが。

ですからほとんどこれね、玉虫でないと、今のような形で全部検討したわけではないけど、そもそもその拙速なだし、魅力ある高等学校の検討を本来やるべきところをやらないで、皆さんの出された意見を集約にするのもわかるも、私は最大公約数のまとめでいく以外にないと思うのです。

（池上委員長）

今の岡庭委員の意見、基本的にいかがでございますかね。

（小池委員）

私は、岡庭委員の意見はいいなと思っています。魅力ある高校づくりをやるためにはどうしても工業科が必要だということになってくれば、それはまた後で考えればいいことで。この時点でやることを可とするのではないと、私は考えています。

（池上委員長）

わかりました。そういうお話の総論に近いとすれば、「普通科設置を原則とするが、校内の施設の活用を考慮し」

(岡庭委員)

「活用をして」です。

(池上委員長)

活用をして。

(岡庭委員)

体験的という部分に繋がたらどうでしょうか。

(池上委員長)

体験的何ですか。

(岡庭委員)

体験的実地的学習のところに入れてしまうのです。

(池上委員長)

それを後ろへつなげるのですね。

(小池委員)

委員長の言うように「原則とする」と一括してしまう方がいいと思います。それで、「校  
内の施設の活用を考慮し、体験的…」と入れた方がいいと思います。

(池上委員長)

小林委員どうでしょう。このくだりは。否定されたということではなく、今後の実行段  
階ではそのことはあり得るという認識はもちろん持つと。

(小林委員)

地元でそういう意味が充分含まれていると。このほか最初からもう考えないよ、ではな  
くて。で、今後せっかくそういう施設がある。何べんも言っているように多部制・単位制  
というのは、必ず普通科でなくてはいけないなんてのは、何もありませんね。

より良い工業科があっても総合科があってもいいわけですね。今度箕輪工業高校に総  
合科ができてもいいわけです。そういう意味で、今いる生徒を考慮してというのが、その  
工業科設置も充分含めてという意味が含まれているなら、やむを得ずというそういうこと  
でも構わないと思います。

(池上委員長)

わかりました。案をまとめてみますので、これは今日の時間の中で、文言をご提示いた  
します。

後いかがでございますか第8区。



(川島委員)

揚げ足取るようで申し訳ございません。25 行目の 7、9 の後、学区の学を取っていただきたい。

(池上委員長)

第 9 ですね。25 行目の。

(川島委員)

4 ページの 25 行目の第 7 旧学区とありますが、これ区ということでよろしいですね。

(池上委員長)

はい、わかりました。

(川島委員)

それともう 1 点。31 行目ですが、上伊那農業だけが代表的農業高校という表現を使われておるところが、やはり引っ掛かるところがございます。ほかは全部拠点校という言葉を使っておりますので、誇りなど、対外あるとすれば、ちょっとこだわりたいなという気がします。

(池上委員長)

上伊那地域の代表的、「上伊那地域」ではなくて「拠点校」。

(小坂委員)

県の、スーパー校だけに指定されているのではないですか。

(吉江高校教育課長)

それはありますね。

(小坂委員)

全県的な質問ですか。どうなのですか、それは。

(吉江高校教育課長)

文部科学省の認定の「目指せスペシャリスト」というものに、認定されておりますが、これはずっと永続的というようなことはありませんので。今の川島委員さんからのご発言に対しては、ちょっと文言調整させていただくということではよろしいのではないかと思います。うのですが、いかがでしょうか。

(岡庭委員)

われわれとすれば、下伊那農業高校と上伊那農業高校は、あくまでも同一で扱うべきだと思います。

（池上委員長）

よくわかりました。では、そういう文言にしましょう。

（小口委員）

5 ページの 1 行目ですが。諏訪から見ると、新しい学校をつくるのだと、箕輪工業高校をね。そう言う意味合いの「新たな」という部分を転換するところでもいいのですし、最後の分でもいいのですが、入れていただければありがたいと思います。

（池上委員長）

どこにしますか。

（小口委員）

例えば、最後に入れるとすれば、生涯学習の観点で絡むと論じられていますが、そういうものを取り入れた、新たな学校づくりを求められている。

（池上委員長）

もう一回行数ともう少し文章をおっしゃってください。もう一回あるところおっしゃっていただけるとありがたいのですが。

（小口委員）

新しい学校をつくるというイメージを、この文でやっておいて、やはり転換して変わったというといけませんので、やはり新しい学校という意味をどこかに付け加えたいと。それには、1 行目かあるいは 5 行目の最後の部分かなと思ひまして。

（池上委員長）

1 行目か 5 行目ですね。

（小口委員）

はい。その辺はお任せいたします。

（池上委員長）

それはそうですね。

（関 委員）

今の小口委員さんの意見に関連して同じことなのですが、前回で転換するという表現を変えたと思いますので、「箕輪工業高校は」ということでなくて、「新たに設置する多部制・単位制高校は」と、そういう表現にしたらいかがでしょうか。

それで、多部制・単位制の特性を生かして、でずうっといきまして、普通科設置を原則とするが、校内の施設の活用を考慮し、それ以下は取ると。少々文章が長くなりますが。

(池上委員長)

まあいいでしょう。ありがとうございました。

(関 委員)

それではそういうことで、文言調整していただければと思います。

(池上委員長)

今の8区のところまではいかがでございますか。ほかには。

ではここで、お休みをさせていただきますのでよろしくお願いします。

#### 【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは、時間がまいりましたので、再開をしてまいります。

5ページの第9区、21行目。ここに入りたいと思います。この内容は6ページ目の6行までで。

(熊谷委員)

それではお願いします。

まず、第9区の3行目ですが、今後専門学校学科高校の再編整備を検討する必要がある、と書かれたわけですが。これ文体化しても、急になんで区外への流出が少ないからというのも、あまり見えないのですが、そこについては、第9区では実は、専門学科高校の再編について、今回相当議論したという認識がありますので、今後は課題だという形ででてしまいたくないと思いますし、実際その内容の 以下にでているのではないかと考えています。

なお、しかも申し訳ないのですが、8ページのその他の意見のところの、「・」の2番目から1、2、3、4項目が9区のことについて、あえて触れていただいているのですが、これ5ページに戻って見ていただきますと、飯田長姫高校と飯田工業高校を統合し、両校の保有する学科を維持するとともに、というこのくだりや、 の下伊那農業高校2行目に、先端で教育展開に向け学科再編等を進めというようなことで、これも専門高校のあり方について、相当議論された内容をこの1なり2なり3に、含まれていると思うのです。それをあえてまた、8ページへいって議論を蒸し返すような、確かにこういう意見はありましたが、例えば校舎をどうするということは、これからの課題にしましょうとか、総合学科をうんぬんということについてはもう触れないでくださいとか、そういう話はしてきた内容なので。これ触れちゃいますと、あえて、何で9区の住民感情を逆立てることをここへ載せたのだということになるので、6のこの4項目をぜひ削除してもらいたいと思いますし、5ページの最後の専門学科うんぬんというのは、これは、住民感情としては、今回相当議論したという認識はしていますので、ぜひ削除をお願いしたいと思うわけであります。

(池上委員長)

はい。第9区では、3行目。

(熊谷委員)

3行でなく、今後という、以下です。これはもう、特にここで触れる必要があるのかという点だと思います。

(池上委員長)

これは、私もよく理解しておりまして、今お説の8ページの6のその他の意見に、強くつながってまいります。それで、6のところはこれから議論していただきますが、委員ご報告の内容について、飯田工業高校と飯田長姫高校を統合するということについて、その今度は、実施計画等は、県教育委員会でというくだりがあったと思いますが、そのところは、しかしなお実施計画を立てるわけです。

いやそこは、そこそこ委員の中にも違う意見もあったわけでして、同時にまた、そのこと自身が、委員会としてそれを言い放すだけでは、責任が取れないのではないかという意見もございまして、あえてその他意見のところが突出しているように感ずるわけでありますが、むしろそのところに、委員会としては思いも入っているという認識を持っておりまして。そういうその他の意見を書いてあると、こういうことでございますので、この内容はまた後ほど、そういう理由で書いてございますので、ご議論をいただければいいと思います。

今の話の、3行目の今後専門学科高校の再編整備を検討するというのをいらないのですね。

(熊谷委員)

はい。

(池上委員長)

これは少し先ほど申し上げたように、つながりがあるわけです。工業というところはつなぎましたね。今度は、商業と農業という話が、実際のところは難しいところに入ったなと、こういう認識で書いているということです。

(熊谷委員)

のところに、飯田長姫高校と飯田工業高校を統合し、両校が保有する学科を維持するとともにそれぞれのうんぬんという文言になっていますよね。この推進委員会の中では、両校の学科を維持するということは、結論になったのだから、ここへ書かれているわけですし、その次の課題としてどうこう、うんぬんというのがありますね。議論されてないわけなので、ここのところは、学科を維持するという結論が出たのでここへ明記されているので、それにとどめておいていいということをいっているわけです。

(池上委員長)

わかりました。では、今後から以下のところは割愛したいと思います、いかがでございますか。

(熊谷委員)

はい。

(池上委員長)

ほかにございますか。よろしいですか。では、問題を後の6に譲りまして、今後このページはこれで終わっていきたいと思います。

6ページに入らせていただいて、5ですね、結論の説明。(1)をまずお願いしたいと思います。

(小池委員)

先ほどの5ページの部分との相関性ということになりますが、19行あたりからですか。ここのところは、箕輪工業というのは基本的に一度消滅をして、新しい多部制・単位制高校としてよみがえって生まれ変わるという前提でありますので、ここのところ、文章をこのようにしたらどうですか。

第8区においては、普通科、専門学科併設高校は目立つ中、箕輪工業を廃止し新たな多部制・単位制高校としての特色を一層強化するよう、設置をするのが妥当である。特性を発揮する高校として、特色を出せる高校として設置することが妥当である、というふうな表現がいいのではないかと思います。

(池上委員長)

では、このほかのご意見もいただきたいと思います。

(小林委員)

どうも、小池先生に反論ばかりして申し訳ないですが、この前、廃止という言葉が、非常に地域住民にまずいということで、廃止という言葉でなく、さっきから新しい学校とかいう、小口委員からも提案もありましたので、そういう形にするのならかまわんと思います。ちょっとどういう表現がいいかは、おまかせしますが、以上です。

(池上委員長)

小池委員いかがですか。

(小池委員)

先ほど、廃止するという表現はいかなものかと言われましたので-。もっといい表現があればそう変えてもかまいません。要は一度箕輪が無くなって、そして新しい多部制・単位制高校が生まれるのですよ、という、そういう意味が伝わればよいのです。

(池上委員長)

わかりました。では、ちょっとこのところは、委員長のところまで預らせていただいて、お願いします。これはもう、特に同意を求めませんから。

ほかはいかがですか。それでは(2)総合学科高校に関する事項。33 ページです。ここから次のページ7ページの11行目までです。

ご意見がないようですので、(3)にいきたいと思います。多部制・単位制。

よろしゅうございますか。では、(4)にいきたいと思います。定時制に関する事項。次のページの8ページです。4行目までです。

(関 委員)

すみません。ちょっと戻って申し訳ないのですが、さっきの(3)の多部制・単位制のところ。17行目ですか16から7にかけて「箕輪工業高校に設置する」という表現、ちょっとまたお考えいただきたいと思います。

(池上委員長)

はい、わかりました。定時制は、これも文言の問題ですが、確かちょっと、長姫、飯田工業最後のくだりですね、高校名はあえてここには書いてありますが、それは確かあったかもしれない。

(熊谷委員)

8ページの3行目のところへ諏訪実と赤穂だけだったのを、第9区の統合された定時制と入れていただいたので、いいのではないですか。

(池上委員長)

いいですね。

はい、それでは、8ページの6、その他のところ。ここは意見を戦わしていただいて、口幅ったくいいますと、これ下伊那の結論は、今後うまく実行段階で計画が立たるのでしょうか。意見は、委員はどういう意見を持っているのでしょうか。という側面で書いてあるのですが、いかがですか。

(岡庭委員)

われわれは、体制が整うまでは飯田長姫高校と飯田工業高校の問題については、ジョイント校でいくという考えです。直ちに飯田工業高校の校舎建ててというわけにはいかないだろうと、思っておりますので、ジョイント高校で考えたということではないかと思っています。

それで、後ここ到下伊那農業高校等、いろいろなこと書いてあるのですが、非常にデリケートな問題もありまして、われわれとすれば、5ページの34行の先端的教育展開に向け、学科再編等を進め、南信州地域の農業の拠点校として一層の充実を図るという、下伊那農業高校の記述のところで、すべて完了とさせていただければ大変ありがたいと思っています。

(池上委員長)

そうすると、その他の意見のところはすべて抹消すると、こういうご意見ですね。

(岡庭委員)

はい、そういうことです。

(池上委員長)

どうぞ。

(関 委員)

私も前から申し上げていることの繰り返しにもなるのですが、ジョイントとは私も考えてなくて、統合していく上で、収容能力の面でそっくり全部長姫を飯田工業に統合するのは、ちょっと無理ではないかと思います。したがって、「・」3番目のような意見を申し上げたわけですが、物理的に無理な原案を推進委員会で出すのはいかがなものかと、やはり実現可能なものとして考えていくべきだと思い、このような意見を申し上げたので、文面をぜひ残していただきたい。

(熊谷委員)

諏訪の皆さんがおっしゃられているように、岡谷東、南の統合で、ですね、いろんな課題がありますよ、と。地域の皆さん方。ですから、私どもも別に岡谷東と南を統合してどういう学校をつくれということについて、9区でもそういう議論があるわけです、議論としては。それが熟成されていないところへ、県からあまり、いろいろこれをとってきて困るわけです。ですからその辺については、例えば、この校舎のことも書いてありますけれど、別に岡谷のとこだって、校舎どっちにしろと書いてないわけですよ。だから飯田、これからあえて校舎のことまで触れる、学科のことまで触れるということは、あまりにも飯田だけが突出しちゃっていて、では、諏訪は議論が収集しないからいいのかという議論になってしまう。飯田でも散々議論はしましたが、この部分は詰まっていませんとあるわけです。それについては、統合議論なりの中で、県教委が主導で、地域と合意形成を図ってってもらおうということであって、ここの推進委員がここまで地元の委員が、そこまで踏み込んでくれるなといっているのを、あえて押し切ってやる意図は、私には正直いってわかりません。

(池上委員長)

ここは先ほどの岡庭委員と、今の熊谷委員ではちょっと私の意向はちがうのですが、考え方としては、熊谷委員、「諏訪のこともおっしゃってください」と、簡単にいうとこういう立場ございまして、この委員会での結論でございますので、なるべくそういう方向で議論がいただければありがたいという立場ですから。その地区の皆さんがそう言ったからというところが、あくまで、でるのは、逆にはいかがなものかという側面はございますが、それはよく内容はわかっていますが、そういうことで考えておきます。

(熊谷委員)

それは、この3通の場合は、やはり地域の事情があるよということで、各地域で部会なりでという形で議論して、それを持ち上げたという経過もあるので、その辺はやはり地域の議論を尊重するという風土はぜひ尊重してもらいたいと思います。

(池上委員長)

尊重して、ですね、結論をそういうことで尊重しましたので、そうですね。結論を尊重して、意見として申し上げます、ということですから、そこは少し幅広く考えていただくほうがいいのではないかなと思います。それで、先ほどの岡庭委員のご発言は、「いやそれは、前段でそのことは言っているのではないか。」と、こういうことですが、あえて具体的に申し上げるなら、という立場で書いていると、こういうことです。

(小林委員)

今度、折衷というわけではないのですが、下伊那の件もわかりますが、2番のところで、物作りの拠点校としてということ、はっきりでていますね。これは、5ページの26、7、8行目。その専門学科のところの物作りとでています。このようにはっきり打ち出してあるのに、商業科がどうなるかということが全く触れていないです。

だから、仮に下伊那の気持ちを尊重するとしても、「ここへ図るものとする」の後へ、「なお、商業科の位置付けについては、さらに検討する。」とかふうに入れておかないと、商業科も飯田工業高校のほうへ行ってしまうのか、と誤解されてしまうこともあるので、具体的にされると困るとさっきいただいているのを尊重したとしても、何らかの形で商業科というのを、ここへ入れておいたほうがよくないかなと思うのです。

(岡庭委員)

全く、この両校が保有する学科を維持するとともに、それぞれの専門学科の教育内容のさらなる充実を図り、というところが一番重要なところなので、私とすれば、やはり今回のわれわれの決定は、推進委員会がその決定に納得できないといえ、そうですが。そういうことからわれわれの考えは、当面飯田長姫高校と飯田工業高校が、1校削減するのだと、いうところで議論をしているわけで。商業科は、では、アグリマネージメントなのか、その工業のマネージメントなのかということから考えれば、ではアグリマネージメントはやはり商業だとか、工業のマネージメントをやるから工業だとか、という議論は統合して、非常に飯田長姫高校の商業科は成績いいわけ。かなり勉強していますし、大学の進学もかなりいいわけですから。

当面、私は飯田工業にしても飯田長姫高校にしても、本当にそれぞれの学校が必死に勉強をして、地域にとっても非常に重要な役割ですし、子どもの進路にとっても進学校へ行くより飯田工業高校へ行って、次の大学を目指したほうが良いという子どももいるということでございますから。

現状の維持というところで、とどめていただけない、というのが私の考えでございます。後の、それから以後の問題というのについては、先ほどのいろんな問題、拙速だとか何とかという意見があるわけでございますが、これを慎重というところで包括的に考えられる



ということところで、私はあえて推進委員会が校舎の指定までする必要はないのではないかと考えています。

（関 委員）

先ほどの話で、やはり子どもは第三通学区の推進委員会として考えるので、区として他の区のところには口を出さない、という立場はいかなものかと思います。

6は、その他に出された意見ということで、最終的には県教委が判断するわけですので、出された意見として残すということなら、それはかまわないのではないかと考えています。

（熊谷委員）

出された意見として残すのならどうでしょう、ということですが、例えば、箕輪工業高校の校舎、校地を活用するのが望ましいという意見は、前回の委員会でこれはやめましょうということで、私は済んだと思ったのです。それをまたここで出てくるというのであれば、今まであった議論をここへ全部載せましょうということになりませんか。

例えば、岡谷東高校の校地の議論について、確か前回あってそれを削りましたね。そういう経過があったのです。岡谷も、どちらの校地を使いましょうというのがあって、その場で議論しながらやりましょうという話なのです。

この飯田工業の話も出たけれど、前回、それはまだいいでしょうということで削ったはずなのです。それがまた出てきた。総合学科の話もそうなのです。総合学科も確かこういう意見ありましたが、そのことはまだ地域で熟成していませんから、では入れるのをやめましょうと、経過としてやって来たものをまた出すのであったら、この十何回中での出た意見全部載せなければならないようになるので、別に私ほかの区で言うてはいけないといったわけではなくて、そうはいつでもいろんな議論はあったが、では、これを載せなければどうしてもまずいということであれば別ですが、なかなか記載についていろんな意見があったということについては、なるべく避けましょうと。

例えば、先ほど箕輪工業高校の工業科のこともありましたよね。みんなそういうことで、いろいろ記載できないならできないでしょうがない、ということできているのを、あえてこの第9のことだけどうしても載せたいというところは、どうしてもなかなか納得できない。

（関 委員）

やや私もこだわるのですが、実現可能かどうかということで、土木、建築全部そっくり飯田工業へ持っていくことは、無理だと思うのです。そういう意味でもやはり、長姫にひとつ残したいと思うのです。

（岡庭委員）

第4通学区でも、木曽高校と木曽山林高校の当面ジョイントからいくという結論がでているわけなので、そういう方向でわれわれはそういうこと考えて、そのうちに、いってみれば子どもの数が減ってくるし、今子どもの数が激減するという時期ではないのです。

ですから、そういう点から考えれば、総合的に考えてから、それはずっと岡谷のことも私もよくわかる話ですから、そういう全体的な考え方の中でわれわれは、そのまま強い

というとおかしいですが、19年何でも実現可能なことを推進委員会でやるという議論では、私はもう、前段の議論のところで、前なくなっているとするならば、それはもうそういう形で、関先生の意見もわかるのですが、全体で議論をやっているわけですから、そういうことで、あえて集約されたというと大方が認めた意見ということになるわけですが、そういう点では、われわれとすれば個人的な意見でありましたというので、委員長の終わり目のあたりで書くなら、あえて私もないのですが、集約された中でこのようになったということには、反対であります。

（池上委員長）

この中で、ひとつひとつお話を申し上げますと、中高一貫校、ここのところニュースかなにかでもよくでる、中高一貫校ですが、このあたりは、よろしゅうございますか。

（小林委員）

これは、地域校のことについての説明がどこかにありましたね。6ページの26行目ですね。この中にすでに、30行のところに、今後は変形型中高一貫高校の検討により、ということがでているので、その他の意見ではなくて、この間から藤本先生も連携型ということ、私もそういうのも大事だなと思っていましたので。その他ではなく、もうここにつづいているので、削除しても良いと思いますがいかがでしょうか。

（池上委員長）

わかりました。

考え方として、その次のところですが、「飯田長姫高校と飯田工業高校の統合の新たな学校は、飯田工業高校の校舎、校地を活用することが望ましい。」と、ここに入れるか入れないかというところはちょっと議論があるところですが、方向としていかがでございますか。

（岡庭委員）

方向とすれば、今のこれはこのような方向ですよね。校地が広いのは飯田工業高校です。

（熊谷委員）

先ほど関先生からお話ありましたが、この新しい学校のクラス構成や、いろんなものがまだ提示されていないわけですね。ですから、どういう教室がいるとか、どういう学校がいるかという議論、これからなので、そんな中で議論していただければいいことなので、ここであえてどうしても推進委員会としてこれを書かなければならない必然性というのは、私はどうしても、なんとなく腑に落ちないのです。

別にこのことを、今後の検討の中に当然出てきます。それは工業高校に進むか、総合学科に、それはみんな知っていますが、あえてこの推進委員会でそこまで、学校の全体像も何も明らかにしない中で、あえてここで据える必要があるのか言っているわけです。

(吉江高校教育課長)

私どもといたしましては、当然未来検討委員会でしたか、南信州のほうで、これだけずうっと議論いただいている中で、1校統合というお話でまとまったとお聞きしております。それで、お話の中ではジョイントというお話もありますが、私どもが考えているジョイント高校というのは、極めて近隣のものでございますので、恐らく今回のこの2校を校舎、校地を残すということになると、ジョイントという位置付けには正直いってならないと思います。

それと後は、これだけ議論いただいている中で、具体的には私ども他の地区の推進委員会もそうなのですが、校舎、校地を、どこを使っていただくかということまで含めて、推進委員会議で議論いただいております。現在進行形のところも含めて議論いただいておりますので、当然ながら、私どもにしてみれば、その他の意見というようなところではなくて、むしろ違う箇所に校舎、校地をどこにするかというようなことも含めて、この委員会において方向性を見いだしていただきたいと考えた次第です。

(池上委員長)

ありがとうございました。ほかにご意見ございますか。

(熊谷委員)

岡谷の場合も当然そのようになるわけですね。

(吉江高校教育課長)

岡谷の場合で申し上げますと、11月の23日に急に出たというお話もございます。この委員会におきまして、ひとつの方向付けをされるということであれば、もちろんやぶさかではございません。ただ、取り扱いが、正直申し上げますと、確かに従来8区、9区でというお話が、最終的に時期の問題はうんぬんとして、7区に話がいった、7区の中の現状につきましては先ほど来お話がある状況でございますので、私どもそこまで含めてまとめていただければ、ありがたいというスタンスではもちろんございます。

(岡庭委員)

いや、そのとおりなら、今吉江さんのようなお話になってくると、具体的に飯田長姫高校と飯田工業高校統合して、ジョイント高校作れと、作れというのは推進委員会の結論に書いていただかなくてはならないということになるわけです。

(小坂委員)

今回の高校改革プランにおいて、そこまで県教委は、要求しているのかどうか。それはもう技術的な問題ではないですか。ひとつにするということであれば、後は合理的な方法、あるいは経済的な方法、校舎の耐久度そういうことからいって、そこまで私はこの委員会に任すべきではない。それは、教育委員会でされればいいことだと思いますが。

(池上委員長)

では、いずれにいたしましても、この件は、一番初めの中高一貫校を×にして、飯田長姫高校とその校地、校舎の件は、ちょっとお待ちください。

それで、それから3番目の件は、まさにその他の意見でございますので、これも取り扱いを考えて。私ちょっと気にしていたのです。最後のくだりの下伊那の統合された定時制は下伊那農業高校へ移管することが望ましい。このくだりはいかがでございましょうか。

これは、あえて逆にそう記すると、私のところが、口を動かしますが、広域連合としては、定時制はどこへお持ちになるかという議論があったのでございましたでしょうか。

(岡庭委員)

これはもう、飯田長姫高校と飯田工業高校定時制を統合するということですから、それはどこへ統合するかということは、決めているわけでは何でもないわけです。ですから、それは県教委がどういう判断するかという話なわけで。

(池上委員長)

ということは、このくだりが具現化されたとしても、そのことはそうであるということしか、仕方がないというのですか。

(岡庭委員)

だから、もともとの議論が学校名まで明記してやるというところの議論までやっていないわけですから、それはやめようではないかということで、止めていただいたほうが私はいいと思います。

(池上委員長)

それはいいのですが、委員としての意見として、下伊那の統合する定時制は、下伊那農業高校では、そういうことがあってもそれはそれでいいのではないかとということによろしいですか。ここに書く意志はないとして。

(岡庭委員)

飯田長姫高校、飯田工業高校の定時制を統合するというのが、推進委員、こういうのは、これはもう結論です。

ですから。そして先ほど吉江さんがおっしゃったように、実施に当たっては地元の意見や地域の実情にふまえて、そこにかけていくしかない。

(池上委員長)

くどくなりますが、下伊那の統合される定時制は、下伊那農業高校へ移管することは望ましいというのも、ひとつの選択肢だ。という立場でいいですか。

(岡庭委員)

望ましいという言葉は、全然議論も何もされてない、と言っているのではないですか。

(池上委員長)

ちょっと確認をしているのですが。

(岡庭委員)

それは、望ましいというには、結論に至るまでに至っていないという。

(池上委員長)

もちろんそういうことです。ですから、その他の意見ですが。

(岡庭委員)

下伊那農業高校の問題については、養護学校との関係で、養護学校の高等部を下伊那農業高校へという話は多分ありました。そういうこともあるのでということで、定時制ということになったのとかよくわかりませんが、それは次の段階など議論していただいて、今回は意見が集約、一致したところだけ、ご記入いただければありがたいこう思っているわけです。

(小林委員)

どうもまたわからなくなったのですが。一番初めのときに、付記事項というのはあくまでも、大方の合意したものですね。

(池上委員長)

そういうことです。

(小林委員)

その他については、意見が分かれたのでもぜひ載せてほしい、ということがあれば載せると、いうことでしたね。

(池上委員長)

そうです。そういうことだったです。

(小林委員)

それで、今意見が分かれています、どうしてもこれは削れということや、入れるべきだというのを、これはどうも私から言わせると、ここで合意というのも難しいような気がする、先ほどの原則からいえばその他については意見が分かれています、載せるということなら両方とも載せてほしいということなら、やはり両方ということではなくて、片方はぜひ載せてほしいと、片方は載せるなど、そういう両方の意見をここへ出したらどうですか。

(池上委員長)

例えば、その他の意見は議論しても全く「電車の線路」であったと、いう文言を入れてそれで書くと、こういうことでいいのですか。

(小池委員)

聞いておりまして、熊谷委員の言われることはやはり、事実ではないかと思います。小坂委員も言っておられましたが、諏訪では南・東統合といったときに、併記とするのなら、「諏訪は必要ない」という意見もあった、と入れていただきたい。その後、その他の意見で細かいことについては、県教委に考えてもらえばよろしい、と考えます。高校教育課は、委員に同意してもらったほうがいいとは言っているが、どこの校舎にするとか、どことどこをくっつけるか、等ということは、我々のレベルでははっきりできるものではない。諏訪も岡谷南と東とジョイント校化するとしたら、どっちに吸収していくほうがいいかなんてことは、我々にもよくわからないことです。諏訪湖があるから南がいいかとも考えたが、あちは地盤が弱くて校舎を建てればつぶれる、沈んでいってしまうという話も聞いているわけです。というようなことで、そこらは県のほうで責任もって、決めればよいことだと私は考えています。ここで委員がわあわあいうことはないという気がします。

(池上委員長)

ただ、後段のお話はよくわかりました。前段のお話は、結論を得たことについて、そういう意見を申し上げるということは、ここに書く意志は全くありません。

ただ、そうでなくて、議論がまとまっていけないという世界で、重要なファクターだということとだけ、こういうふうに入れたいということを願っていたと、こういうことなのです。

(熊谷委員)

そういうことに期待するのであれば、例えば「こういう意見が議論されたがまとまらなかった」としていただかないと、「望ましい」と書かれますと一般住民から見れば、この推進委員会、望ましいというけれど何だというふうに見られてしまいますので、議論はしたけれども結論に至らなかったということを、はっきり明記していただきたいと思います。

(池上委員長)

それでは、例えば望ましいというのは誤解を生んでしまうと、これはどちらかという結論の下話であると、近い話だというふうにとらえられるので、全く意見が違うけれど、重要な中へ入れたのならいいと、こういうことでいいですか。

(熊谷委員)

どうしても入れなければ駄目というのなら、議論がされなくも自分らも納得して委員会も意見がなされたなという文言を入れればちょっと安心だということ。

（池上委員長）

ではそうさせてもらいます。そのくぐりは、またこのところだけはちょっとまとめさせていただきます。

（野村主幹教育支援主事）

すみません。事務局ですがよろしいですか。

もし、そういうことであれば、その他の意見のところへ。今出されましたような意見もありましたが、まとまらなかったなので、表現を付けさしていただいて、ということによろしいでしょうか。

（池上委員長）

当然そういうことです。

（岡庭委員）

さっきは、「集約」という言葉を使ったが、今度集約できなかったと。

（池上委員長）

ええ、それはそういうことです。

（岡庭委員）

そのようにしてもらえばいいと思います。

（池上委員長）

はい。それではそうさせてもらいます。

それでは、そのくぐりを終えて、後はこのところは、私はそう思ったところでございますが。

（藤本委員）

追加でいいでしょうか。

（池上委員長）

どうぞ。追加というのはどこですか。

（藤本委員）

その他のところで。

一部の委員さんからは賛成がいただけなかったのですが、少人数、30人学級ということですけども、平成31年度までを見越した今回の高校改革で、一言ぐらい文言を入れていただかないと、以後40人学級ということにずうっとなるわけです。

確かに学習集団としての、少人数学級というのはチームティーチング等で、いろいろ地域高校など、いろいろなところで現実には行われているのですが、やはり制度として、確

かに国の壁はあったとしても、小学校の高学年まで、現に少人数学級はきており、後6年ぐらいで高校でも可能となります、順調にいけばの話ですけど。他県の様子を見ても、地域高校、職業高校では35人というところもあるし、やはり、世界的な流れですので、ぜひ少人数学級に向けて、今後お願いしたいということをひとつ追加でお願いしたい。

もうひとつは、岡庭委員さんも指摘され、私も賛成したのですが、やはり現在の高校教育が抱えている根本的な問題、職業教育をどうするか、なぜ生徒が勉強しないのか、それはいろいろ問題があると思うのですが、例えばいくら競争させて彼らに、勉強させても、彼らはそれに見合うだけの未来が見えてこないわけです。

根本的な問題があるわけで、だからもうほとんどの高校生が勉強しない。本を1冊も読まない生徒が5、6割いる、そういう根本的なところを、本来的にはここで議論すべきだったけれど、検討できなかったわけです。私は、それは今後の長野県教育の大きな課題だと思います。

それから、岡庭委員さんが指摘された職業教育の位置付けというのもそうですので、2点だけ、少人数学級に向けてのひとこと、多分その他にしか入らないと思いますが。もう1点は、やはり後期中等教育が抱えている根本的なそういう課題について、県教委は、きちんとした体制、組織で、検討していただきたいと、そう思うわけです。

(池上委員長)

2つありまして、ひとつのほうは、35人学級の問題ですね。ということですね。それは入れるのですか。

(藤本委員)

ぜひ高校でも、次の改革に向けて検討していただきたい。

(池上委員長)

どうでしょうか、それは。

(岡庭委員)

そういうふうを書くということになったのだから。

意見のある人はみんなそういったらどうですか。それでは、そう全部書いてもらおうと。

(池上委員長)

そうおっしゃらないでください。それは、ちょっと次元がちがう。

(小林委員)

藤本先生のおっしゃることは、理想としては私も大賛成なのですが、現実問題として、現在30人規模にしても今小池先生も大変苦労しているのは、小学校5、6年生は市町村負担するという。ましてや中学なんかはとてそこまでいっていない。そういうものすごい難しい問題がありますので、当面は少人数学習集団、これをとにかく本当に充実してもらいたい。学級ということになると、義務では個別教育で徹底したやり方で指導案なんてい



うのは相当細かいことまでしっかりやっています。高校が画一的な今みたいな講義方式で、やっているのだったら、意味ないと思うのです。ですから、そういう高校そのものが学習形態まで大転換するくらいの意志を持たないと、これは、私はあまり意味がないと、そういういろいろ検討しなければならないことあるので、果たしてこれ簡単に載せてしまっていいのかどうかというのは、非常に疑問です。

（小池委員）

当然、35 人規模学級ということは、中学でもやりたいし、高校でもやりたいわけです。ここは、第3通学区の高校改革プランですよね、第3通学区の。そのスタンスに立ったところで、やはりまとめていくしかないのではないかと思います。

（池上委員長）

どうですか。そういうことで。

（小口委員）

小池先生からそのようにいわれるといいにくいのですが、つい第三通学区からも、30 人規模学級ということよりも、私が思うのは、やはり先生の質をどういうように上げるかと、こういう努力は怠らないでほしいと、そういうことは一言どこかで書かないといけないと思うのです。

（池上委員長）

はい。一応入っていますが。

（小林委員）

これは魅力ある学校づくりの。2 の にあって、そして、その具体的なことを、2 ページの 31 行目から教職員の質的向上についてありますが、これは、私も絶対必要だと思っています。

（池上委員長）

ほかにございますか。

（丸茂委員）

少々戻りまして恐縮ですが、4 ページの 4 行目。第9区において飯田高校と飯田風越高校をますます進学高校にとうんぬん書いてございますところ。諏訪では急務と思われる、ちょっと優しい言い方過ぎると思うので、「急務である。」に変えていただけたらと思いますのがいかがでしょうか。

（池上委員長）

ちょっと、もう一回おっしゃってください。

(丸茂委員)

諏訪地区では、清陵高校と二葉高校に関しての文言がないので、こちらの「第7区は」というところから4行かけてその進学校への、高校の魅力づくりの急務と思われると結んでありますが、急務と思われるではちょっと少し優しすぎると私は感じました。9区までの文章を読んでいった中で、ほかのところは、第8区も第9区もきちんとした、断定的な言葉で結んであるにもかかわらず、7区だけ「思われる」ではちょっと甘いと思います。

(池上委員長)

「急務である」という、例えば。

(丸茂委員)

「急務である」に変えていただきたいと、私は思いますがいかがでしょうか。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

(藤本委員)

6ページ目の30行なのですが、前回は連携型中高一貫について、資料をお出しして、ぜひということで賛成をいただいたと思いますが、その文面で少子化の中で維持のあり方と書いてあるのですが、もちろん、学校の存続、維持なのですが、やはり私は、新たな魅力づくりだと思うのです。やはり、単なる維持だけでなく、魅力づくりという文言を是非付けていただきたいと思います。ただ、もちろん結果的に学校の存続につながるのですが。私は本来的には、ぜひ魅力づくりとして連携型の可能性を地域で検討していただければと、そんな気がするわけです、維持だけでなく「魅力づくり」という言葉をどこかにお願いしたいと思います。

(池上委員長)

こちらで考えさせていただいて。

(藤本委員)

はい、委員長さんをお願いします。

(池上委員長)

わかりました。ほかにはいかがでございますか。

(藤本委員)

まだ戻ってもいいのでしょうか。

(池上委員長)

ただ、「終わりに」はちょっと、私が意見を申し上げてと、今思っておりました。簡単に申し上げますと、終わりにはずまず皆さんへの感謝を申し上げる、ということがまず、この起承転結の結になることが別として、冒頭にそういうことでございます。それから、20行目から28行目は、絶対にリーダーたらんとすれば、優秀な子どもたちをたくさんだしたほうがいいということと、後段の世界は、その中でも例えば、能力の問題でなくて学校に行きづらいと、というような友達が、これ社会現象としてだんだんでてきてしまったと、いうところを何とかしなくてはいけない、というのが本意でございます。

最後のところは、県教委の今までの教育に関する検討の方法として、皆さんおっしゃっているように、衆知を集めて検討する機会をつくっていただきたいと、いうことを結び目にしたというのが実は本意でございます。文章はそういうことにいたしましたので、そのようにさせていただきたいと、こう思っています。

(小池委員)

感想ですが、池上委員長さんの思いはわかるわけですが、ただ、誤解も招く危険性があるかなという点を、ちょっと感じるのです。

24行と25行です。集団になりにくい和不登校等となり、将来ニート化の懸念がある生徒を、の部分であります。読み取り方によっては、不登校即ニートに、ととらえられるわけです。不登校でも大学までどんどん行っている生徒もいますので、こんな表現はどうですか。

中段に挙げている不登校や、中退生となる等、将来に何らかの懸念がある生徒も増加傾向にあります。これらの解決のためにも、新たに設置された云々と。やはり、不登校だけをあまり目立たせないような表現の方がいいと思います。

(池上委員長)

わかりました。結構です、よくわかりました。

今のところも含めて、その他さかのぼっていただいても結構でございますので。

(小林委員)

修正ということではなくて、内容を理解してもらいたいというので、2ページの先ほどでた、教員の資質向上の問題の中で、31行目もそうですが、33行目の適切な配置、それから適切な人材配置と書かれています。このことについて実は、この何回もやられた高校改革委員会の中で、ほとんど触れられなかったことですが、私はどうしてもこれで入れてほしいです。今本当に高校の先生方それぞれ努力されているわけですが、ずっと以前から、本当に適切な人材配置になっているのかどうか、非常に疑問であります。

小中学校は、今、小池先生が大変苦労されているわけですが、県教委と地教委と校長会が協力して、人事配置、人事異動についてかなり苦労して、一人の人をどこへいかすかというようなことを大事にしているわけで。例えば、この進学高校にふさわしい、この先生は本当にふさわしい先生なのか。本当に地域高校にふさわしい先生なのかという、そういうことがどうも今までの中で、いろいろなうわさでしかわかりませんが、どこまで今、現

場の校長先生がタッチされているのか、理解できていないところもありますので。小中学校のようなわけにはいかないと思うのですが、かなり校長会と県教委が連携して、適切な人材配置をしていかないといけないと思います。研修に力を入れることも当然必要ですが、研修だけですむことではありません。この人材配置というのは、校長とか県教委がかなり力を発揮していかないと、なかなかいい配置にならないのではないかと、そういう意味を理解していただきたい。

（池上委員長）

文言に入れましょうか。

（小林委員）

結構です。

（池上委員長）

いいですか。はい。高校教育課でなにかございますか。

（米澤教育次長）

大事な問題ご指摘いただいているわけですが、それぞれご自分のところ、一生懸命やってこられているわけですが、見えにくい部分もお互いあるかもしれません。実は高校におきましても人事異動要項等も、大きく変えて、それぞれのやりたい意欲が生かされるようになってきておりますし、また、校長先生のほうでも、この学校の課題にとってこういう人が必要ということが、より明確に出せるような形になってきておりますので。そのへんのことは、少し進んでいるということを申し添えながら、文面は文面として、教員の研修というのはすべてに必要ですので、残していただいてよろしいのではないかと、という気がいたします。

（池上委員長）

ありがとうございました。ほかにいかがでございますか。

（藤本委員）

2 ページの付記のところへ戻って、ちょっと確認だけしたいのですが、付記のところで大分議論して、多分議事録としても残っているから、大丈夫だと思いますが、2 番目の「・」の「極力」は消えたのでしょうか。「特に」を入れて。

（池上委員長）

はい。

(藤本委員)

復活はしないわけですね。

それから、もう1点、付記の3つ目の「・」ですが、多部制・単位制のところ。各方面からの提言というところで、私とか、上農の定時制の保護者の皆さんのご意見、提言等を尊重して、ということですが、県教委の事務局の方も、そういう趣旨だということですが、このところで、どうしても日程が一番気になっているのです。

各方面からの出された日程というのは要するに、上農定時制については多部制・単位制の状況が素晴らしい学校になれば、そうなるまでは、という気持ちを込めて、「日程等の提言を尊重して」という言葉を「各方面から」のところに追加はいかがでしょうか。

もちろんそういうことを考慮するのだというお言葉を教育次長さんからいただいているのですけれど。文言としてやはり日程等の提言をぜひ、最後の3つ目の「・」のところです。

(小林委員)

提言というのは、さっきもいいました。確かにそういう定時制の保護者、同窓会の意見や、それと私たちが作った案、いろいろあるわけで。一番生かしてもらいたいのは、日程よりもこの中身のことです。いっぱい漏れていることがあります。散々苦労して作ったことが、ただこの文面だけで、すらすらとやられては困ると思います。そういう意味で、こういう書き方でいくのは不安がありますが。

私は実をいうとかなり細かいことを出したのですが、このようにそろえるということなら、それではしょうがないということです。先生のおっしゃる日程のことも、中身の内容のことも同じです。

(藤本委員)

意見の反映という面から。

(小林委員)

それは、日程だけだすというのはちょっとおかしいかなと思います。

(藤本委員)

日程及び中身。

(小林委員)

日程だすなら内容もださなければおかしいということで、提言でいいのではないかな。この現状で。

(池上委員長)

ここは、それはもうおいてくださいというのを、提言ということで選ぶ。

(藤本委員)

提言の中に入っているということで。

(池上委員長)

それでは、先ほどの多部制・単位制のところ。5 ページ目のところで、上のほうのくだりでありますが。

急ぎ私の足りないところをフォローしていただいて、事務局で案を書いていただきましたので、ちょっとそれを通読いたしますから、よろしくお願いいたします。

新たに設置する多部制・単位制高校は、その特性を生かし多様な青少年の育成を目指す。午前、午後、夜間の各部とも普通科設置を原則とする。校内施設の活用を図り、体験的実地的、実施学習を取り入れて、キャリア教育の充実を進める。また、生涯学習の観点からも工夫が求められる。こういう文言をいただきました。このあたりでまとめさせていただきますが、よろしゅうございますか。それではそれをご了解ください。

ほかにもし、もちろん議論がつぎなえるところでございますけれど。

そろそろというご意向でよろしければ、まとめていきたいのですが、まず、「てにをは」の部分について、さらに先生方のご指導をいただいて、文言を少し、助詞を変えとか、という世界はちょっとお許しをいただきたいということです。

それから、それを行った後、皆さん方に最終報告書をもちろん御送達を申し上げると、いうことにさせていただきます。県への報告なのでございますが、これは私とすれば、皆さんに全員に県へ行っていただいて、と思いますがそうもいかないでしょうから。私と副委員長が県に参上してご報告申し上げるという形で一応まとめていきたいと思いますが、よろしゅうございますか。

(全委員)

はい。

(池上委員長)

はい。ありがとうございます。それでは以上で終了いたしたいと思いますが、いかがでございませうか。はい。それでは一言お礼を申し上げます。

7カ月前に県庁で委嘱をいただきました。申し上げたことは確か、火中の栗を拾うと申し上げたと思います。

拾い終えたかどうかちょっと、大変心配があるわけでございますが。今日お集まりの各位に。特に委員の皆さん、それから職員以下の皆さんにご指導やご鞭撻をいただきまして、何とか今日の結論を出したということでございます。

お願いでございますが、それぞれご提案がございましたように、今後も教育問題はやはり衆知を集めて、広く会議をおこしていただいて、やはり決定をしていただきたいと心から思います。大変お忙しいところを、時間を割いていただきまして、ご協力を、真剣にいただいたことを感謝申し上げます私の終わりとします。ありがとうございました。

（吉江高校教育課長）

本当に委員さん各位におかれましては、16 回に渡りまして誠にありがとうございました。本日米澤教育次長が参っておりますので、ご挨拶を申し上げたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

（米澤教育次長）

ただいま池上委員長さんから、本当に心温まる、また、ご苦労があったのを、お言葉をいただいて、本当に感無量でございます。

報告書につきましては、後日ご提出をいただけるということでございますが、推進委員会としての開催は、本日が一応これで最後ということでございますので、御礼方々一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

昨年の5月29日に、第1回の推進委員会を開催いたしまして、私どもから魅力ある高等学校づくり、それから増数の決定基準に基づく再編整備と、また、その総合学科高校、多部制・単位制高校の配置に関する事項と、ということでお願いをしたわけでございます。

それ以来、16 回にわたりまして本当に精力的にご熱心に、また献身的に審議を進めていただき、それぞれのお立場から貴重なご意見をいただきました。

ご審議に当たりましては、学校を視察していただき、また地域からの意見やご提言を参考にしていただきながら、全体的な立場に立って慎重な審議を進めていただきました。このことに関しまして深く御礼を申し上げるところでございます。

第三推進委員会におきましては、議論の進展の中で各区ごとにグループ会議というものを設けての検討をするという流れになったわけでございますが、その中で本当に各委員さん、呻吟（しんぎん）するような苦しい思いの中、報告書をまとめていただいたと思っております。

今後は、本県の高校教育が一層充実したものになりますように、ちょうだいいたしましたご報告書を参考にいたしまして、今年度末までに教育委員会として、実施計画を策定し、速やかに高校改革を進めて参りたいと考えております。

第三推進委員会の委員の皆さんにおかれましても、今後も引き続きさまざまなお立場から、長野県教育の発展のためにご支援ご協力をお願いできましたらと考えているところでございます。

最後になりましたが、この歴史的な高校改革プラン推進委員会の、これまでのご協力に改めて感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。